〔島根県立大学松江キャンパス研究紀要　Vol. 61　83～93(2022)〕

# お伽歌劇《ドンブラコ》における「桃太郎」の独自性についての考察

渡　邉　寛　智
（保育学科）

Consideration of the Uniqueness of "Momotaro" in the Fairy Tale "Dom-Brako"

Hironori WATANABE

キーワード：オペレッタ、舞台芸術、音楽教育、昔話
Operetta, Performing Arts, Music Education, Folk Story

## 1．はじめに

1912(明治45)年５月に歌舞伎座で初演された北村季晴（1872-1931）が創作したお伽歌劇《ドンブラコ》は、日本で本格的な西洋音楽のスタイルを取り入れた子どものための音楽劇である。タイトルから想像できる通り、扱われた題材は昔話の「桃太郎」である。作品の多くの部分は現在と変わらない桃太郎が描かれているが、《ドンブラコ》では、時に戦争を思わせるような台詞や場面があり、鬼の描写が西洋的なものを感じさせる場面がある。現代に伝わる「桃太郎」と、《ドンブラコ》の独特とも言える「桃太郎」の内容に異なる部分があるのはなぜなのか、本研究では明治時代という時代の流れの中で「桃太郎」という題材がどのように扱われてきたのかについて着目する。また、明治期に使用されていた学校教材の１次資料と、明治期に人気を博した巌谷小波（1870-1933）の「桃太郎」の１次資料、及び当時の「桃太郎」や巌谷が提唱したお伽芝居の先行研究などを踏まえて、お伽歌劇《ドンブラコ》における「桃太郎」の独自性を明らかにする。

## 2．お伽歌劇《ドンブラコ》について

### 1）作品の成立

お伽歌劇《ドンブラコ》の楽譜が出版されたのは、1912(明治45)年１月である（北村，1912)。創作を行った北村は冒頭の「はしがき」で、出版される数年前に某少年雑誌社による「読者の会」が催されることになり、子どもに向けた童話・遊戯・お伽噺を題材に作曲を試みた、と述べている。「読者の会」では、全曲が完成することはなく、第二場の終盤まで作曲された。第三場は、閑院宮殿下、ならびに同妃殿下の御前で演奏する機会があった際に完成した。その後、周囲の人々に勧められ第四場、第五場が補足され全曲が完成する。全幕を通しての初演は、1912(明治45)年５月に歌舞伎座で行われた。その２年後、1914(大正３)年４月には宝塚少女歌劇（後の宝塚歌劇団）の初公演で上演され、人気を博すことになる。

北村は《ドンブラコ》を歌い演じる子どもが無理なく歌えるように、状況によって演奏形態を変更できるような作品にしていた[1)]。子どもたちが歌い演じることが楽しいと感じさせる作品となった《ドンブラコ》は、その後の子どもたちの音楽劇の発展に大きな影響を与えることになる。

### 2）お伽歌劇《ドンブラコ》の場面設定

お伽歌劇《ドンブラコ》で描かれている桃太郎は、時に戦争を感じさせるような台詞や場面があり、現在知られている桃太郎とは印象が異なる。では、現在の桃太郎とどのような違いがあるのだろうか。《ドンブラコ》の場面設定を見る前に、現在の桃太郎のストーリーの要点をまとめる。

「現代における桃太郎」

① お爺さんとお婆さんが暮らしている。
② お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行く。
③ 川上から大きな桃が流れてくる。
④ 桃が二つに割れて男の子が生まれ、お爺さんとお婆さんが「桃太郎」と名付け育てる。
⑤ 桃太郎は大きくなると「鬼ヶ島へ鬼退治に行く」と言い出す。
⑥ お爺さんとお婆さんはきび団子を用意する。
⑦ 犬、猿、雉の順に現れ、桃太郎にお供する（お供する際にきび団子を分け与える）。
⑧ 海を渡り鬼ヶ島に向かう。
⑨ 鬼は桃太郎に恐れをなして降参し、打ち出の小槌などの宝物を差し出す。
⑩ 宝物を手車に積ませ、お爺さん、お婆さんの待つ村に帰る。

現在出版されている市川（2015）、小澤・長崎（2006）、影山（2017）長谷川（2009）、松居（1965）による「桃太郎」では、作者によって多少の相違があるものの、物語の内容は上記の要点を踏まえていると言える。若干の違いが認められるのは、桃太郎が鬼退治に行くことを告げる場面で、鬼が悪いことをしていると、鬼退治の理由を語るパターンと、鬼退治の理由を語らずに、唐突に鬼退治に行くパターンの二通りが存在するところである。また、松居による「桃太郎」では、鬼がお姫様をさらったので取り戻すために鬼退治に行く、といったストーリーが描かれている。

現在出版されている桃太郎は、当然ながら場面設定などはなく、わかりやすいシンプルな内容である。次に、《ドンブラコ》の場面設定を見ると以下のようになっている。

お伽歌劇《ドンブラコ》（1912）

第一場　爺婆住家の場
　第一段（序）桃太郎生ひ立ちの段
　第二段　桃太郎門出の段
第二場　出征途上の場
　犬、猿、雉、勢揃ひの段
第三場　鬼が島海上の場
　鬼が島討ち入りの段
第四場　鬼が島城内の場
　第一段　鬼共討取りの段
　第二段　鬼王降伏の段
　第三段　王宮内酣宴の段
第五場　桃太郎故郷の場
　凱旋歓迎の段

このように、《ドンブラコ》では、細かな場面設定がなされている（図１）。読み物とは違い、実際に舞台で劇として上演されるために、日本の伝統的

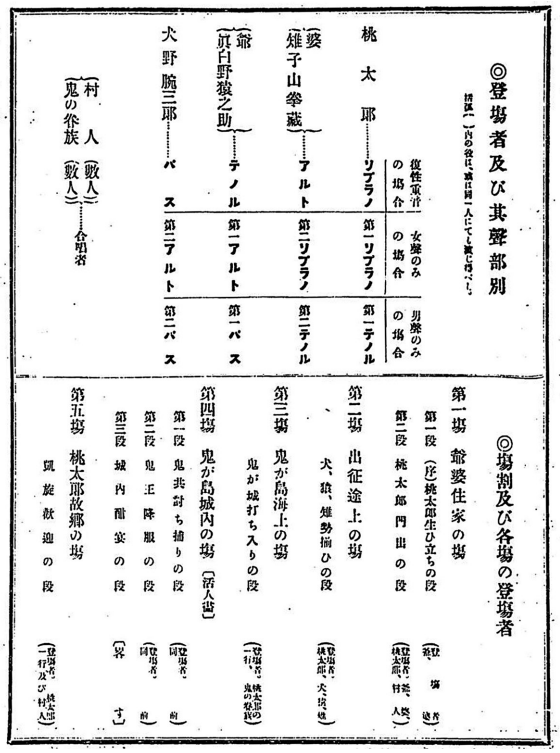


図１　《ドンブラコ》登場者、及び各場面
北村季晴（1912）「ドンブラコ」共益商社
（国立国会図書館デジタルコレクション）

な歌舞伎などの舞台芸術と変わりない場面設定となっている。ストーリーは現在と変わらない部分もあるが、第三場以降は独特な場面設定がなされている。

### 3）お伽歌劇《ドンブラコ》の特徴的な場面

#### (1) 第一場　爺婆住家の場

お伽歌劇《ドンブラコ》では、音楽劇ということもあり「合唱」が存在する。村人として舞台上に現れる場合もあれば、舞台袖でいわゆる影コーラスとして歌う場合がある。

物語の始まりは合唱によって「むかしむかしそのむかし、爺様と婆様があったとさ」から始まる。その後は、「爺様は山へ芝かりに」「婆様は河へ洗濯に」、という現在でも変わりないストーリーが軽快な音楽と共に展開される。「第一段（序）桃太郎生ひ立ちの段」の終わりでは、合唱によって次のような状況説明が歌われている。

「この子、非凡の力持ち、そのうえ剛毅で親孝行。読み書き田業の暇には、毎日野山で戦事（いくさ）の稽古。今では村中隠れ無き、評判者と成りにけり。」

音楽劇では、場面の終わりに合唱を用いて昂揚感を持たせる場面が多い。この場面でも、合唱に桃太郎の印象を語らせ、見る側にその印象を強く与える効果を持たせている。ここで初めて「戦事（いくさ）」という言葉が使われているところにも注目したい。

次に、「第二段　桃太郎門出の段」では、桃太郎が爺様、婆様に鬼が島に鬼退治に行くことを告げる。黍団子を求められた爺様、婆様、村人は、みなで黍団子を作ることになる。この場面で村人の一人は次のように語り出す。

「それでその鬼退治の兵糧に、黍団子が要ると言はれるのぢゃが、なんとみんなでお手伝ひして、それをこしらへると仕ようでは無いか。」

ここでは「兵糧」という言葉が使われている。現代の「桃太郎」では、黍団子を持たせる場面で「兵糧」という言葉は見受けられない。

#### (2) 第二場　出征途上の場

「第二場　出征途上の場」の「犬、猿、雉、勢揃ひの段」では、現代の「桃太郎」と同じく、犬、猿、雉の順に現れ、お供をするものたちに桃太郎は黍団子を分け与える。可愛らしい音楽とともにお供が次々と現れるユニークな場面である。

#### (3)「第三場　鬼が島海上の場」

「第三場　鬼が島海上の場」の「鬼が島、討ち入りの段」では、桃太郎たちが鬼が島へ近づいた時に、鬼たちが讃美歌を歌っている場面が設定されている（図２）。

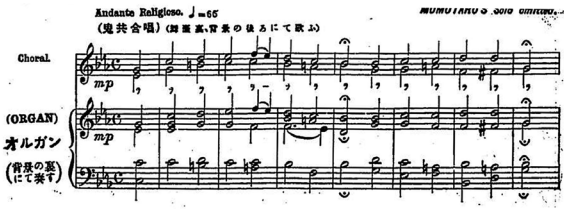


図２　《ドンブラコ》鬼の合唱
北村季晴（1912）「ドンブラコ」共益商社
（国立国会図書館デジタルコレクション）

もちろん、この場面の合唱は舞台上で歌うのではなく、舞台袖から影コーラスとして歌う。そうすることで、この讃美歌を歌う合唱は、舞台上にいる桃太郎たち、客席にいる聴衆から姿が見えないようになる。讃美歌だけが舞台上、客席に響き渡るので神秘的な雰囲気を醸し出す場面になっている。日本の昔話「桃太郎」に突如として讃美歌が響くのは唐突ではあるが、鬼を西洋的なものとして印象付けるねらいがあったものと考えられる。実際に、桃太郎と雉、猿たちは、この鬼たちの讃美歌に対して次のように反応する。

雉
「はて、何か不思議な声が聞こえてきますが、あれは何でござりましょう。」
桃太郎
「あれは鬼が島の王宮で、神に祈祷の歌を捧げて居るのぢゃ。」
猿
「あれが鬼の合唱でござりますか。」

唐突に響き渡る西洋の讃美歌を聞いた当時の人々はこれを理解できなかった可能性がある。これに対して、雉は聴衆の気持ちに共感するように問いかけ、桃太郎が説明的な言い回しで答え、猿が「合唱」という言葉で捕捉している。

**(4) 第四場　鬼が島城内の場**

「第四場　鬼が島城内の場」が、このお伽歌劇《ドンブラコ》の「桃太郎」で最も特徴的な場面である。この第四場だけは音楽劇ではなく、「活人画」という手法で作られている。活人画とは、演者が劇を台詞で進めるのではなく、物語の背景の前で演者が劇中の人物に扮装して、絵画的な手法で無言のまま物語を展開する手法である。《ドンブラコ》では、舞台上で演者が無言で芝居を行い、無声映画のように弁士の役回りの人が物語を語っていたと考えられる。

この「第四場　鬼が島城内の場」では、三つの場面が設定されており、活人画によって演じられた。「第一段　鬼共討取りの段」では、桃太郎が犬、猿、雉を率いて鬼王に縄をかけようとする様子が描かれており、「第二段　鬼王降伏の段」では、桃太郎が鬼たちを降参させ、宝物が並んでいる様子が描かれている。「第三段　王宮内酣宴の段」は、鬼が島の王宮で講和条約が成立し、祝宴が開かれる場面である。敵も味方もなく互いに打ち解け、鬼たちは合唱を披露し、犬、猿、雉もそれに応えて合唱を披露する。その後、鬼王の娘が侍女を従えて舞踏を披露し、鬼王は独唱を披露する。桃太郎は日本の舞踏を懇願され、三弦楽の伴奏で桃太郎が舞い、犬、猿、雉もそれに続く。やがて、そこにオーケストラが加わり大合奏となり、舞踏中に幕が降りる。いかにも音楽家が創作したユニークな内容である。桃太郎が圧倒的に勝利したかと思えば講和条約が開かれる展開は強引ではあるが、双方が敵味方なく互いに打ち解け、音楽や舞踏で楽しむというところは、《ドンブラコ》の「桃太郎」の中において最も注目すべき場面である。

**(5) 第五場　桃太郎故郷の場**

「第五場　桃太郎故郷の場」の「凱旋歓迎の段」では、そのタイトルの通り、桃太郎が故郷に凱旋し、村人たちに歓迎される様子が描かれている。この第五場は、第四場で用いられた活人画ではなく、音楽劇となっている。

まず、村人の一人が、「鬼が島の戦争は、桃太郎軍の大勝利」と声高々に桃太郎の帰りを今か今かと待っている。婆様は桃太郎が手傷を負ったのではないかと心配するが、爺様は「我が日本の軍勢には、いつも天使様の御威光が附いてござるから、決して心配する事は無い」と答える。そこに桃太郎が村に帰ってきて、爺様、婆様、村人たちは大喜びで出迎える。物語の終わりに桃太郎は一同に対して、「ここに一同で、目出度く我が国歌を歌ふ事に致しましょう」と言い、「君が代」を全員で斉唱して物語は幕を閉じる。「君が代」を斉唱して物語が終わるというのも独特な終わり方であるが、明治日本の凱旋的表現として、北村はここで国歌を歌うことを選択したと考えられる。また、この場面で北村はト書きに、「登場者も聴衆も一堂にて合唱」と書いている（図３）。つまり、演出的には舞台上の演者、並びに聴衆も起立して国家を歌うことを指示している。

《ドンブラコ》は、第一場から第三場までは、少年雑誌の「読者の会」、閑院宮殿下、ならびに同妃殿下の御前で演奏する目的で創作したことから、親しみがある楽しげな内容になっている。それに対して、後から創作された第四場、第五場の内容は、桃太郎が鬼退治に行く場面だけに、劇的な内容になっている。特に、戦争を思わせるような言葉は、第一場から第三場よりも、第四場、第五場で直接的に戦争を指す言葉が使われている点にも注目したい。

## ３．明治の学校教材における桃太郎

### １）国語教材として採用された「桃太郎」

「桃太郎」という昔話が初めて教科書の教材として取り上げられたのは、1887（明治20）年に文部省編輯局から発行された『尋常小学読本』が最初である[2)]。第26課から第28課で、現在における「桃太郎」とほぼ変わらない内容が掲載されている（図４）。当時の「桃太郎」のストーリーの要点を整理すると次のようになる。

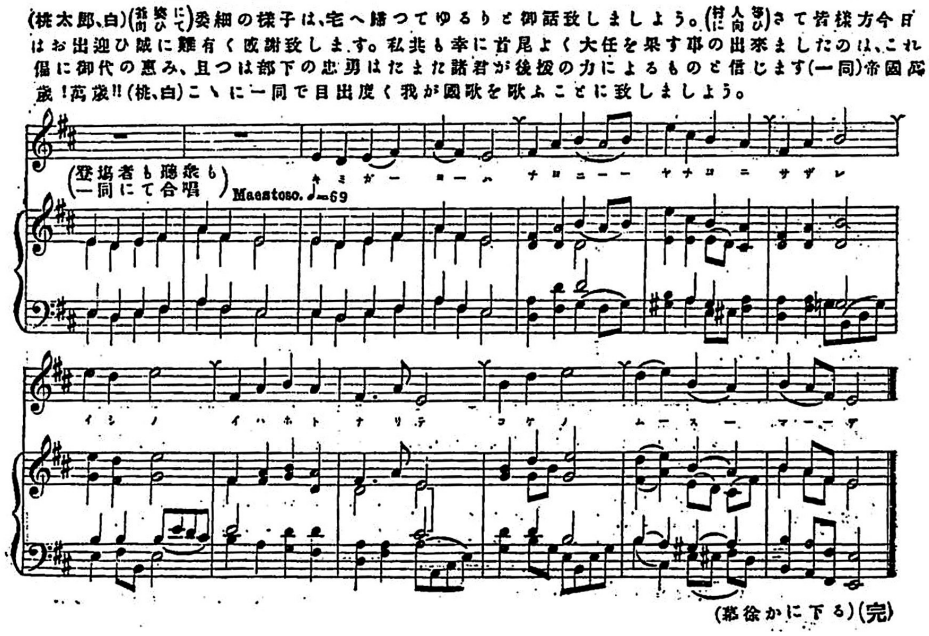


図３　《ドンブラコ》「君が代」の楽譜
北村季晴（1912）「ドンブラコ」共益商社（国立国会図書館デジタルコレクション）

『尋常小学読本』の「桃太郎」（1887）

① お爺さんとお婆さんが暮らしている（原文表記は「ぢゞ」と「ばゞ」）。
② お爺さんは山へ草刈り、お婆さんは川へ洗濯に行く。
③ 川上から大きな桃が流れてくる。
④ 桃が二つに割れて男の子が生まれ、「桃太郎」と名付け育てる。
⑤ 大きくなると桃太郎は「鬼ヶ島へ宝物を取りに行く」と言い出す（理由は言わない）。
⑥ お爺さんとお婆さんはきび団子を用意する。
⑦ 犬、猿、雉の順に現れ桃太郎にお供する（お供する際にきび団子を分け与える）。
⑧ 鬼ヶ島に討ち入る。
⑨ 鬼は桃太郎に恐れをなして降参し、打ち出の小槌などの宝物を差し出す。
⑩ 宝物を手車に積ませ、お爺さん、お婆さんの土産として持ち帰り、犬、猿、雉にも分け与える。

この『尋常小学読本』に掲載されている「桃太郎」は、桃が川から流れてくる果実型[3]であり、桃から生まれた桃太郎は成長すると鬼を成敗しに行き、鬼を成敗した後で宝物を持ち帰る。簡潔で無駄がなく、現在出版されている「桃太郎」の原型と言えるような内容である。

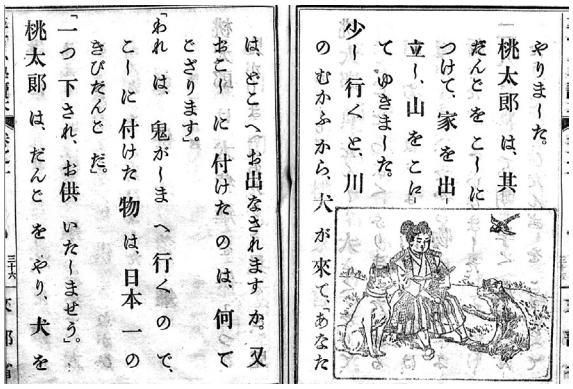
やりまーた。
桃太郎は、其だんとをこーにつけて、家を出立ー、山をこえてゆきまーた。
少ー行くと、川のむかふから、犬が來て、あなたは、どこへお出なされますか。又おこーに付けたのは、何ですか。
「われは、鬼がーまへ行くので、こーに付けた物は、日本一のきびだんとだ。
「一つ下され、お供いたーませう。」
桃太郎は、だんとをやり、犬を

図４　「尋常小学読本」桃太郎
文部省編輯局（1887）「尋常小学読本」
（国立国会図書館デジタルコレクション）

その５年後、1892（明治25）年に文学社から発行された『小学国文読本』（山県悌三郎著）に掲載されている「桃太郎」と、『尋常小学読本』の「桃太郎」を比較すると、文体や表現に違いはあるが物語の内

容に大きな違いは見受けられない。しかし、1894（明治27）年に開戦した日清戦争の６年後、1900（明治33）年に冨山房から発行された『国語読本』（坪内雄蔵著）に掲載されている「桃太郎」では、桃太郎が鬼ヶ島に鬼退治に向かうことを伝える際に、「わたくしは、おにがしまへ、おにたいぢにゆきますから、ひょうーろーを、こしらえてください。」という台詞になっている。この場面、前述の1887（明治20）年に文部省編輯局から発行された『尋常小学読本』では、「私は、鬼がしまへ、たから物を取りに行きたい」となっており、1892（明治25）年文学社から発行された『小学国文読本』では、「私は、おにがしまへ、おにたいぢにゆきたい」という台詞になっている。どちらも「兵糧」という言葉は使われていない。これについて滑川（1981）は、「ひょーろー（兵糧）」は当時の戦争や軍隊を想起させる用語であるとしている。

この『国語読本』では、物語の終わりに「めでたく、わがくににかへりました。」という一文がある。『尋常小学読本』、『小学国文読本』では「我が国に帰る」というような表現は見られない。したがって、この「桃太郎」での鬼ヶ島は、海の向こうにある外国の脅威であることを想像させる表現であり、当時の時代背景が反映されたものであると考えられる。この『国語読本』の「桃太郎」について滑川（1981）は、日清戦争における「皇軍の勇戦」の国民的興奮を投影してか、従来に見られないほど積極的な桃太郎像が形成されていると述べている[4)]。

明治の初頭では、現在につながる標準的とも言える桃太郎の物語が教科書に取り上げられていたが、日清戦争を経てからは戦争や外国の脅威を想像させるような物語へと変化している。このような変化は、《ドンブラコ》にも影響を与えたと考えられる。村人たちが桃太郎のために黍団子をこしらえる場面では、やはり「兵糧」という同じ言葉が使われている。しかし、《ドンブラコ》で使われている「戦争」「桃太郎軍」「凱旋」といったような直接的に戦争を指すような言葉は当然ながら国語教材には使われていない。

**２）唱歌における「桃太郎」**

桃太郎を題材とした唱歌で、現在でも歌い継がれている曲は、岡野貞一が作曲した「桃太郎」であろう。この「桃太郎」は、1911（明治44）年に発行された『尋常小学唱歌』に掲載されている作品である。現在では、唱歌「桃太郎」の歌詞が歌われるのは２番、もしくは３番までであるが、実はこの歌には６番まで歌詞が存在する。４番では、鬼ヶ島を攻め滅ぼし、５番では鬼から宝物を分取る、さらに６番では万歳万歳と、宝物が載っているであろう手車を皆で押している光景が歌われる。唱歌「桃太郎」の後半部分は、勇ましく戦う姿の桃太郎が描かれているのである。

「桃太郎」文部省唱歌　作曲：岡野貞一（1911）

１．桃太郎さん桃太郎さん、お腰につけた黍団子、一つわたしに下さいな。
２．やりませうやりませう、これから鬼の征伐に、ついて行くならやりませう。
３．行きませう行きませう、貴方について何処までも、家来になって行きませう。
４．そりや進めそりや進め、一度に攻めて攻めやぶり、つぶしてしまへ鬼が島。
５．おもしろいおもしろい、のこらず鬼を攻めふせて、分捕物をえんやらや。
６．万々歳、万々歳、お伴の犬や猿雉子は、勇んで車をえんやらや。

岡野の「桃太郎」が有名すぎるためにあまり知られていないが、1900（明治33）年に発行された『幼年唱歌』の中に掲載されている「ももたろう」も隠れた名曲である。作詞は田辺友三郎、作曲は納所弁次郎が行った。前述の「桃太郎」よりも10年ほど前に世に出た作品である。その歌詞は以下の通りである。

「ももたろう」（1900）
作詞：田辺友三郎、作曲：納所弁次郎

１．ももからうまれた　ももたろう
　　きはやさしくて　ちからもち

おにがしまをば　うたんとて
いさんでいえを　でかけたり
2．にっぽんいちの　きびだんご
なさけにつきくる　いぬとさる
きじももろうて　おともする
いそげものども　おくるなよ
3．はげしいいくさに　だいしょうり
おにがしまをば　せめふせて
とったたからは　なになにぞ
きんぎんさんご　あやにしき
4．くるまにつんだ　たからもの
いぬがひきだす　えんやらや
さるがあとおす　えんやらや
きじがつなひく　えんやらや

田辺友三郎が作詞した「ももたろう」では、1番で「きはやさしくて　ちからもち」と、優しい桃太郎の内面に触れている。勇ましさを感じさせるのは、3番の「はげしいいくさに　だいしょうり　おにがしまをば　せめふせて」と、この部分だけである。曲調も1911年の「桃太郎」が快活な曲調であるのに対して、朗らかさを感じさせる歌になっている。

岡野による「桃太郎」と、納所による「ももたろう」、どちらの作品も子どもが親しみやすい歌になっているが、歌の後半は時代を反映した勇ましい桃太郎を歌う内容になっている。

当時、桃太郎を題材とした唱歌は歌詞だけのものを含めて25曲も存在した[5)]。曲数だけ見ても、桃太郎がいかに子どもにとって親しみやすく、また題材としても取り上げやすかったことがわかる。

北村は、1902（明治35）年に出版された『唱歌教科書』で、岡野をはじめとする作曲家たちと唱歌作りに携わっていた[6)]。北村は教科書作りにも携わっていただけに、桃太郎の人気や、子どもにとってどのような歌が歌いやすいのかを熟知していたと考えられる。

## 4．お伽芝居における「桃太郎」

### 1）巌谷小波の『桃太郎』

お伽芝居を日本で初めて提唱したのは児童文学者の巌谷小波である。後述するが、巌谷の提唱したお伽芝居は、川上音二郎（1864-1911）が舞台で実現することになる。また、巌谷が手がけた「桃太郎」は、独自の表現によって絵本のような素朴な桃太郎ではなく、劇的な表現によって本格的な児童文学としての桃太郎になっている。

巌谷は、1894（明治27）年7月発行された『日本昔噺』第一編の「桃太郎」で、前述の教科書で描かれている桃太郎よりも劇的で荒々しい桃太郎を描いている。その9年後の1903（明治36）年4月に、巌谷は1894年版の「桃太郎」の改訂を行う。

この改訂について、巌谷は改訂版の序文で「文章を簡単で平易にと書き直した」と述べている。その理由として、自身がベルリンでドイツ人に日本語を教える際にテキストとして使用していたが、漢字漢語の表記が多く外国人が日本語を学ぶには困難であった、としている。また、この改訂版では、外国人が日本語を学ぶためのテキストとしても使えるように、日本語のテキストに加えて英語に翻訳されたテキストが加えられている。

先に述べた教材としての「桃太郎」と比較すると、巌谷の「桃太郎」は教材で描かれている桃太郎より劇的な描かれ方をしており、台詞の端々に戦争や当時の時代背景が反映された描写となっている。物語の内容は『尋常小学読本』の「桃太郎」と大きな変わりはないが、文体と台詞には大きな違いがある。

本研究では、巌谷小波によって読みやすく改訂された1903年版の「桃太郎」と、1887年に文部省編輯局から発行された『尋常小学読本』に掲載されている「桃太郎」の部分的な比較を行う。まず、冒頭の場面を見ると、それぞれ次のように描かれている。

『尋常小学読本』「桃太郎」（1887）
むかし、ぢゞ　と　ばゞ　と　が　有りました。
ぢゞ　は、　山へ　くさかりに、ばゞ　は、川　へ
せんたく　に　行きました。

川上　から、　大き　な　桃　が　一つ、ながれて来ました。　それ　を　取りて見ます　と、大そうう まさう　な　桃　で　ありました　故、ぢゞ　と ふたり　で、　たべやう　とて、　家　に　持ちかへりました。

巌谷小波『日本昔噺』「桃太郎」（1903）

むかしゞ[7]或る處に、爺と婆がありましたとさ。或る日の事で、爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に、別れゞに出て行きました。

婆さんはやがて川へ來て、適宜處に盥を据ゑ、其中へ入れて來た、汗染みた襦袢や着古した單衣を、代るゞ取り出しては、頻りに洗濯して居りますと、やがて川上の方から、一抱へもあらうと思はれる、素敵に大きな桃が、ドンブリコツコ、スツコツコ、ゞ、ゞ、と流れて來ました。

婆さんは之を見て、「さてゞ見事な桃ではある。妾も今年で六十に成るが、産まれてからまだ此様な大きな桃は、つひに見た事が無い。然し喰べたらさぞ甘味かろう、一ばんあれを拾つて行て、お爺さんの土産にしやう、それがよいゞ」と、獨り點頭きながら、手を伸ばしたが届きません。四邊を見廻しても竿はなし。一寸途方に暮れましたが、やがて工夫を考えて、流れて來る桃に向ひ、「遠い水は辛いぞ！近い水は甘いぞ！辛い處は除けて來い！甘い處へ寄て来い！」と、手拍子を面白く拍つて、二三遍繰り返して言ひました。すると不思議にもその桃は、次第ゞに寄て來て、婆さんの前で止まりました。

婆さんは急いで拾ひあげ、匆々に洗濯物を片付けて件の桃を小脇にかゝへて、急いで吾家をさして歸りました。

巌谷の「桃太郎」は児童文学として、子どもたちの想像力を掻き立てるような描写となっている。「汗染みた襦袢や着古した單衣を」という表現も、お婆さんの生活感が滲み出ている現実感のある描写である。また、川からながれてきた桃を取る場面でも、「遠い水は辛いぞ！近い水は甘いぞ！辛い處は除けて來い！甘い處へ寄て来い！」とお婆さんが桃に面白みのある声のかけ方をしている。

このような巌谷独特の描写は他の場面においても変わらない。桃太郎が成長して、「鬼ヶ島へ宝物を取りに行く」と言い出す場面の『尋常小学読本』の「桃太郎」と、巌谷の「桃太郎」の台詞の違いを見る。

『尋常小学読本』「桃太郎」（1887）

「私　は、鬼がしま　へ、たから物　を　取り　に行きたい」

巌谷小波『日本昔噺』「桃太郎」（1903）

「（前略）元來此の日本の東北の方、を遙かに隔てた處に、鬼の住む島が御座います。其鬼共此の日本の國に寇を爲し、人を取り喰ひ、寶物を奪ひ取る、世にも憎くき奴で御座りますから、私只今から出陣致し、彼奴等を一挫に取て抑へ、寶を殘らず奪ひ取て歸つて來やうと思ひます。」

『尋常小学読本』の「桃太郎」では、桃太郎は唐突に宝物を取りに行くと言い出す。しかし、巌谷の「桃太郎」では、具体的に鬼が島の場所を示し、その鬼たちが日本にどのような悪事を働いるのかについても明らかにしている。また、桃太郎が語る言葉は、強い表現で自分の決心を語っており、劇的で緊張感のある台詞となっている。この劇的で緊張感のある台詞は、雉が鬼の城に突入する場面で、さらに大きな違いを見せている。

『尋常小学読本』「桃太郎」（1887）

雉　は、一ばん　さき　に、門　の　やね　を　とびこえ、次　に　猿　は、へい　を　のりこえて、内　から　門を　開きました。

巌谷小波『日本昔噺』「桃太郎」（1903）

雉子は大將の命を受けて、急いで飛で参りましたが、やがて鬼が島の眞中の、城の屋根に降り立ちまして、羽ばたきを一ツしながら、「やァやァ此島の内に住居する鬼共確に承はれ、只今此處へ天つ神の御使、大日本の桃太郎將軍、征伐の爲めにお出向ひに成つたぞ。命が惜くば速に角を折り、寶を捧げて降参しろ。若し又刄向ふ時に於ては、かく云ふ雉

子を初めとして犬猿の猛將の面々、日頃鍛へた牙にかけて、片ッ端から汝等を、咬み殺して呉れるぞ！」と大音聲に呼はりました。（後略）

この場面では、「只今此處へ天つ神の御使、大日本の桃太郎将軍、征伐の爲めにお出向ひに成ったぞ」や、「雉子を初めとして犬猿の猛将の面々、日頃鍛へた牙にかけて、片ッ端から汝等を、咬み殺して呉れるぞ！」など、雉が猛々しく鬼に向かって口上を述べる。

このように荒々しく勇猛果敢な桃太郎の描かれ方は、『尋常小学読本』の「桃太郎」では見られない。滑川（1981）は、このような巌谷独特の桃太郎が描かれた理由として、「教育勅語下賜、そして、その普及に力を注ぐ当時の情勢が背景にあった」と述べた上で、「日清戦争という戦時色も強まる情勢が背景に動いていた」[8]と述べている。明治中期の社会情勢は、巌谷が描く桃太郎に大きな影響を及ぼしたのである。また、この点について鳥越（2004）は、「小波の『桃太郎』は、（中略）ナショナリズムを無批判に讃美する「皇国の子」としての桃太郎をつくりあげる出発点となり、その後の日本の桃太郎像の形成に、有形無形の影響を持つにいたった」[9]と述べている。

巌谷の描いた桃太郎像は、明治中期以降の桃太郎に大きな影響を与え、北村が創作するお伽歌劇《ドンブラコ》にも大きな影響を与えたと考えられる。

**２）巌谷小波、川上音二郎によるお伽芝居の始まり**

1903（明治36）年に、巌谷小波は児童向けの雑誌『少年世界』でお伽芝居「春若丸」を発表した。日本においてお伽芝居という分野の作品は、この「春若丸」が初めてである[10]。巌谷はお伽芝居の意味について、「お伽芝居とは、子供にみせる芝居の事」と、「はしがき」の中で述べている。また巌谷は、「春若丸」はドイツの少年小説として名高い『ハンリヒ・フォン・アイヘンビルヒ』という物語を、日本の時代物に直して芝居風にしたと述べている。なお、この作品は芝居による上演を考え、戯曲として書かれている。1900年９月から1902年11月までドイツに滞在していた巌谷はドイツ滞在中に子どものための芝居に触れ、日本でも子どものための芝居が必要であると考え、お伽芝居「春若丸」を創作するに至ったのである。

巌谷が創始したお伽芝居を、実際に舞台で上演したのが、台詞を主とした演劇、いわゆる「新派劇」を実践した川上音二郎である[11]。川上とその妻である貞奴（1871-1946）はヨーロッパ巡業中にドイツに滞在していた巌谷と出会い、巌谷が提唱したお伽芝居に取り組むことになる。その後、日本に帰国した川上夫妻は、児童文学者の久留島武彦（1874-1960）の協力を得てお伽芝居の上演を行う。最初の演目は、時代劇ではなく西洋風の演目にしたいという貞奴の意向もあり、「春若丸」ではなく巌谷が手がけた『世界お伽噺』から「狐の裁判」「浮かれ胡弓」が選ばれ、1903（明治36）年10月に東京の本郷座で初演され成功を収めた[12]。この初演の成功は、日本にお伽芝居という新しい文化が根付くことになった重要な出来事であった。川上夫妻はその後もお伽芝居の上演を続けることになり、12月には巌谷の『日本昔噺』から「桃太郎」の脚色上演を行っている[13]。残念ながら当時脚色された台本の所在は不明であるが、前述の巌谷版「桃太郎」の内容が反映された台本が作成されたと考えられる。

## ５．お伽芝居からお伽歌劇へ

巌谷小波は、1905（明治38）年２月に出版された雑誌『少年世界』の中で、「笑い山」というお伽歌劇を発表している。しかし、この段階による巌谷のお伽歌劇は、本格的な音楽劇として上演された訳ではなく実験的な試みとして上演が行われた[14]。1912（明治45）年６月に出版された『お伽歌劇』では、楽譜は存在せずに台本だけの掲載としている。巌谷自身も、解題で「歌劇と云うものは、まだ日本で容易に出来まい。」と述べている。しかし、巌谷のお伽歌劇が発表される２年前の1903（明治36）年７月に、東京音楽学校の学生有志によって、日本人による初めての本格的なオペラ上演が行われていた。演目はクリストフ・ヴィリバルト・グルック（1714-1787）の歌劇《オルフェウス》（1762）[15]であった。さらに２年後の1905（明治38）年３月には、北村季晴が

日本人による初めての創作オペラと言われている《露営の夢》を創作し、歌舞伎座で上演され人気を博した。本格的な西洋オペラの上演や日本語による創作オペラが誕生する頃に、巌谷は子どものためのお伽歌劇を提唱していたのである。北村がお伽歌劇《ドンブラコ》を創作する７年前のことであった。

巌谷が提唱したお伽芝居は川上音二郎によって舞台での上演が行われたが、お伽歌劇は本格的な上演には至らなかった。だが、お伽歌劇という提唱は、当時の芸術家たちにも少なからず影響を与えていたはずである。北村も例外なく影響を受けたであろう。当時の北村は演劇にも興味を持っており、1911（明治44）年に「演芸同志会」というグループを結成して第１回の公演まで行い、自ら出演している[16)]。演劇好きであった北村は、巌谷が提唱し、川上が行ったお伽芝居の精神に共鳴したはずである。それゆえに、音楽家としてお伽歌劇の完成を目指し、1912（明治45）年に、お伽歌劇《ドンブラコ》を完成させるのである。

## ６．まとめ

昔話「桃太郎」は、明治時代になると教科書などで取り上げられるようになる。また明治中期に巌谷小波の劇的なスタイルで描かれた新しい「桃太郎」は、たちまち子どもたちの人気となり、その後の「桃太郎」を題材とした童話や絵本に深い影響を与えることになった。巌谷の「桃太郎」によって明治期における桃太郎は、現代における漫画のヒーローのような存在として人気を博すことになる。海の向こうにある外国の脅威と戦わなければならなかった時代に、子どもたちは自分たちの姿と桃太郎の姿を重ね合わせて心躍らせたに違いない。それだけに、勇猛果敢に鬼を打ち払う桃太郎のストーリーは爽快で受け入れやすく、子どもたちの憧れとなったのである。北村はその当時の「桃太郎」に着目し、子どもたちに親しみやすい「桃太郎」を題材にしてお伽歌劇《ドンブラコ》を創作したのである。

お伽歌劇《ドンブラコ》と教科書に取り上げられた「桃太郎」を比較すると、特に日清戦争の後で出版された「桃太郎」で使われている戦争を思わせるような「言葉」に共通性を見出せた。また、巌谷の「桃太郎」が持つ劇的な世界観は、そのまま《ドンブラコ》の第四場をはじめとする勇ましい桃太郎の姿に通じるものがある。一方で、鬼が讃美歌を歌って西洋的な雰囲気を持たせている場面、戦いの後の講和条約の宴で繰り広げられる舞踏、合唱、オーケストラによる饗宴、凱旋的な第五場で物語の終わりに歌われる「君が代」などは、明治期の教科書、巌谷の「桃太郎」では描かれていない場面である。これは、1904（明治37）年に開戦した日露戦争、当時のロシアの脅威、戦後のポーツマス講和会議、日露戦争に対する戦勝的な気分が《ドンブラコ》の内容に強く反映されたものと考えられる。当時の日本を取り巻く情勢は、そのまま教育や文化に強い影響を与え、例外なく《ドンブラコ》にも強く影響を与えたのである。また、北村は巌谷が提唱したお伽芝居・お伽歌劇に強く共感していた可能性が高い。明治期に人気を博した「桃太郎」という題材を、北村は音楽家という視点で解釈し、作曲家ならではの手法で他に類を見ない桃太郎の独自性を《ドンブラコ》の中に持たせることができたのである。

## 注

１）渡邉（2021）p.77
２）滑川（1981）p.152
３）江戸時代では、お爺さん、お婆さんが桃を食べると若返り桃太郎を生んだ「回春型」が存在したが、明治時代以降は桃から生まれる「果実型」が主流である。
４）滑川（1981）p.176
５）松村（2019）p.188
６）松村（2019）p.169
７）原文の繰り返し記号は「く」
８）滑川（1981）p.65
９）鳥越（2004）p.16
10）冨田（1976）p.37
11）冨田（1976）p.38
12）冨田（1976）p.42
13）冨田（1998）p.147
14）冨田（1976）p.78

15）原題は《オルフェオとエウリディーチェ Orfeo ed Euridice》
16）田中（1957）p.74

## 引用文献


市川宣子（文）、長谷川義史（絵）（2015）「日本名作おはなし絵本 ももたろう」小学館
巌谷小波（1894）「日本昔噺 第一編 桃太郎」博文館「国立国会図書館デジタルコレクション」
巌谷小波（1903）「お伽芝居 春若丸」『少年世界』名著普及会「国立国会図書館デジタルコレクション」
巌谷小波（1903）「日本昔噺 第一編 桃太郎」英字新報社「国立国会図書館デジタルコレクション」
巌谷小波（1905）「笑い山」『少年世界』博文館「国立国会図書館デジタルコレクション」
巌谷小波（1912）「お伽歌劇」博文館「国立国会図書館デジタルコレクション」
小澤俊夫、長崎桃子（文）、小林豊（絵）（2006）「子どもとよむ日本の昔ばなし⑬ ももたろう」くもん出版
影山徹（2017）「空からのぞいた桃太郎」岩崎書店
北村季晴（1912）「ドンブラコ」共益商社「国立国会図書館デジタルコレクション」
共益商社（1902）「唱歌教科書」共益商社「国立国会図書館デジタルコレクション」
田中栄三（1957）「新劇その昔」文芸春秋新社「国立国会図書館デジタルコレクション」
坪内雄蔵（1900）「国語読本」冨山房「国立教育政策研究所教育図書館」
冨田博之（1976）「日本児童演劇史」東京書籍
冨田博之（1998）「日本演劇教育史」国土社
鳥越信（2004）「桃太郎の運命」ミネルヴァ書房
滑川道夫（1981）「桃太郎像の変容」東京書籍
納所弁次郎・田村虎蔵（1900）「幼年唱歌」十字屋「わらべ館所蔵」
長谷川摂子（文）、はたこうしろう（絵）（2009）「てのひらむかしばなし ももたろう」岩波書店
松居直（文）、赤羽末吉（絵）（1965）「ももたろう」福音館書店
松村直行（2019）「童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ－明治・大正・昭和初中期－〈普及版〉」和泉書院
文部省（1911）「尋常小学唱歌」「近代教科書デジタルアーカイブ」
文部省編輯局（1887）「尋常小学読本」「国立国会図書館デジタルコレクション」
山県悌三郎（1892）「小学国文読本」文学社「国立教育政策研究所教育図書館」
渡邉寛智（2019）「子どものためのオペレッタの楽譜と台詞の構成についての研究」『島根県立大学松江キャンパス紀要』第59号 p.67-78


（受稿 2021年9月30日，受理 2021年11月10日）